

今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第33回は、菊間祭りで奉納される「お供馬ともうまの走り込み」を紹介し、その由来を歴史散歩したいと思います。

第33回 かわらぬ愛と菊間お供馬

●3年ぶり開催のお供馬

令和4（2022）年10月15・16日の菊間祭りでは、3年ぶりに「お供馬の走り込み」（県指定無形民俗文化財）が披露され、今治市菊間町浜の加茂神社境内には多くの観客が詰めかけました。家内安全と五穀豊穡ほうじょうの願いを込め、この年は小学2年から中学3年生の男子12人の乗り子と12頭の馬が出走することになりました。

筆者がこの行事を初めて見たのは、県外の大学へ通い始めた30年前のことです。NHKの全国放送で紹介されたため、とても印象に残って

います。300mの参道が馬場に姿を変え、少年がサラブレッドにまたがり疾走するのは。乗り子は絢爛けんらんな衣装をまとい、馬も艶やかな装具を身につけ、人馬一体で駆け抜けていく姿は神々しく、故郷の良さを再認識しました。

この行事を支える組織が「菊間町愛馬会」です。馬主は厩舎やエサを確保できる農家の方々と、乗り子は馬主の親族らが務め、馬は高知競馬などを引退した元競走馬たちです。馬にとってはセカンドキャリアを菊間で過ごし、

1年に1度の菊間祭りで観客の視線を一身に浴びることになります。

9月から日曜ごとに練習を始めますが、神事に関わる行事のため、関係者は浜の海岸で身を清める潮ごりを欠かしません。本番1週間前の馬場設営後は毎日練習を重ね、前日は市街をパレードしてPRに努めます。走り込みばかりが注目されますが、12頭が商店街を闊歩かつぽし、JR予讃線踏切や国道196号を横断する光景はとてもシュール（非日常的）です。



参道を駆け抜けるお供馬（加茂神社参道／令和4年10月16日撮影）



前日の市街パレード（国道196号を横断する光景）

●お供馬の起源

「お供馬」の名称は、神輿が御旅所まで練り歩く際、これに神馬しんめがお供することに由来するようです。祭礼の主役は神輿のため、お供馬の走り込みが奉納されるのは、地区内の牛鬼・神輿・ダンジリ・獅子舞などの宮出しが始まるまでの午前中となっています。宮出しの準備が整うと、走り込みは最後のフィナーレを迎え、中学生の乗り子を中心に勢いのある数頭が競い合うように参道を駆け抜けていくのです。

走り込みの起源は、11世紀後半以降に菊間地方にあった京都上賀茂神社かみがも（京都市北区）の荘園に由来するようです。本社の競馬会くらべうま神事を維持するため全国各地に荘園があって、「菊万庄」と「佐方保」もその一つでした（上賀茂神社の競馬は、京都三大祭りの一つ葵祭あいまつりの前儀で現在も実施）。その名残として、菊間地区には加茂神社が、亀岡地区佐方には賀茂別雷かもわけいかづち神社があります。

しかし戦国時代になると、京都への年貢銭納入が滞るようになり、本社側から菊万庄代官の得居氏へ催促の手紙が送られています。戦国末期の佐方保代官は来島城主の来島氏（村上通総みちふさ）でしたが、両氏の納入は太閤検地で荘園が消滅するまで続けられたようです。



愛馬会の乗り子たち（加茂神社参道／令和4年10月15日撮影）

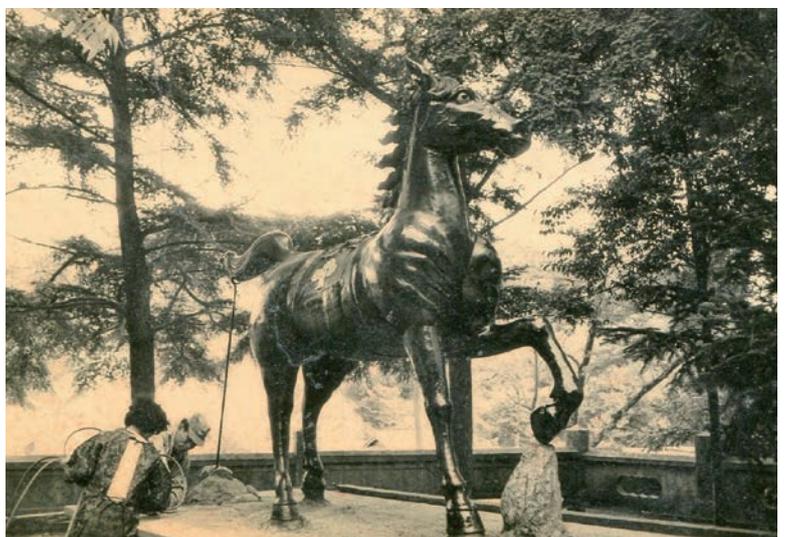
●菊間瓦とお供馬

菊間瓦の起源は諸説あり、身近なルーツは藩政時代の株仲間けん26軒株、にさかのぼることができます。松山藩では、領内で瓦の製造・販売を行う業者を53株に制限し、このうち半数の26株を菊間の業者に与えました。これらの窯元が野間郡浜村の船ヶ浦（現、菊間町浜の西海岸）に拠点を構えたことで、菊間はしだいに瓦の積出港として賑わうようになります。

菊間が瓦産地となった要因には、原料の粘土や焼成用の松葉・薪たきぎが豊富に採れたことなどがあります。この運搬に活躍したのが農耕馬でした。藩政期の資料『野間郡手鑑てかがみ』によると、17世紀後半から18世紀前半頃の野間郡の牛馬飼育頭数は牛1,026頭・馬1,064頭で、人口は1万5385人、戸数は3,096戸でした。中でも別府村（67%）・西山村（69%）・池原村（78%）・長坂村（78%）の戸数に対する馬の保有頭数の割合は群を抜いていました。

大正11（1922）年のお供馬行事には128頭の参加があり、昭和30（1955）年頃まで飼育場鍛錬の目的で旗競馬はたけいばも催されていました。現在の加茂神社境内の神馬像は青銅製ですが、大正13年にも青銅製が献納されたことがあります。これは、太平洋戦争の金属供出で失われ、代わりに昭和21（1946）年に全国的にも珍しい瓦製神馬が献納されました。しかし、その神馬像も昭和50（1975）年に役目を終え、今は頭部のみが「かわら館」に展示されています。

農耕馬の減少で、一時はお供馬行事が中断されたこともありましたが、かわらぬ愛、で令和の今日に継承されています。



光野亀太郎が手がけた加茂神社の瓦製神馬像
（古写真／錦松工房所蔵）